

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

JFL 環境における

日本語専攻学生の発音学習過程

—イントネーションを中心に—

施 安安

2022年 9月

本研究は音声教育が不足している環境下の JFL 日本語専攻学生を対象に、どのように発音の学習を行っているのか、どのように自然なイントネーションを習得できたのかを調査し、その実態を把握することを目的とする。本研究では学習環境が主に日本国外にある JFL 学習者を対象とし、各自の発音学習過程を透明化した上、発音のレベルとの関係性について考察した。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

## 第 1 章 序論

筆者はかつて台湾の大学で日本語を専攻とする学習者の一人であり、その中で受けた日本語教育は偏りのある指導だった。授業のほとんどは読み書きを中心とした内容であり、発音に関する指導はほとんどなかった。音声教育が行われていない理由としては実際の教育現場にて音声教育を重要視しない教師の存在や、教育機関にて主な授業が大人数である以上、時間も限られているため音声教育を実行すること自体が困難である。

このように音声教育が行き渡っていない JFL 環境で育った学習者の中では、日本語の音声の学習方法を知らない者が多数存在しており、指導を受けなかった故にコミュニケーションにてトラブルに遭う者もよく見かける。その結果、日本語の学習自体に対して学習意欲を喪失する学習者や、母語話者と良好な関係性を築くことができない学習者、将来の活躍に大きな支障をもたらした学習者が筆者の周囲に多く見られた。しかし、筆者の周囲にも一定数の学習者は自らの学習を通し、母語話者並みの発音を習得できた学習者が存在している。そこで、筆者は自然な発音を習得できた学習者とそうでない学習者の発音学習過程に興味を持ったのが本研究のきっかけである。

発音が自然に聞こえる要素の一つとし、イントネーションが大きな影響を与えていることが先行研究にて明らかにされた。佐藤（1995）では「単音」よりも「韻律」、そして韻律的要素の「高さ」、「強さ」、「長さ」の中では「高さ」が自然な発音に対する影響力が大きいことを明らかにした。他に、関（1989）では母語話者による発音の自然性評価をした結果、自然さに左右するのにイントネーションの影響が一番著しいことを明白にした。

以上を踏まえ、本研究の目的は音声教育が不足している JFL 環境下にいる日本語専攻学生の学習過程を調査し、その中にどのような要素が自然なイントネーション習得に役に立ったのかを明らかにすることで、今後海外から日本語を学習している外国人日本語学習者の発音学習をサポートする際に、参考できる手がかりの提供を目指したい。

したが、上記の目的を明らかにするため、以下二つの RQ を設定した。

**RQ1** : 自然なイントネーションを習得できた学習者の学習過程はできなかった学習者  
とどのような相違点や共通点があるのか。

**RQ2** : **RQ1**で明らかになった相違点がそれぞれの発音にどのような影響を与えたのか。

## 第 2 章 先行研究

第 2 章では、本研究に関連づけるイントネーションが発音に与える影響力とその習得研究、または音声指導の現況と学習者の発音学習ストラテジーに関わる諸研究を概観した上、本研究の位置付けと本研究における用語の定義をした。

まずはイントネーションの定義に関わる諸研究を提示し、イントネーションの定義について説明した。その上、イントネーションの影響力を佐藤（1995）、関（1989）でその重要性を力説し、イントネーションの音声指導現況が教育現場では不足であることを先行研究の概観から提示した。また、張（2015）はイントネーションの習得は日本語の学習年数及び在住期間との関係性が低く、学習者ごとの個人差が大きいことを明白にしたことから、異なる学習者個人のイントネーション学習過程を調査する必要性について語った。

次に、発音学習における学習者の特徴研究、学習ストラテジーに注目した諸研究を概説した上、多様化した豊富な背景を持つ外国人日本語学習者のイントネーション習得に注目した研究が少ないであることを示した。そして、発音の向上に関わる要因を調査した研究の中で、量的研究による相関性の分析研究が多く、学習者一人ひとりの学習実態を深掘りするような質的研究が足りないことを問題提起した。

以上の先行研究を踏まえ、本研究は JFL 日本語専攻学生を対象として発音の学習過程、特にイントネーションの学習に注目し、自然な発音を習得できた学習者とそうでない学習者両方の学習過程を明らかにしたい。そして本研究の調査結果が、外国人日本語学習者の発音学習、またはその音声指導や自律的学習のサポートに役に立つことを望む。

最後に、本論文に用いられた用語に関する定義の説明をした。

## 第 3 章 調査方法

第 3 章では、調査手順、調査協力者、調査方法について記述した。

まず、調査は調査協力者のプロフィール及び発音学習動機や発音学習ストラテジーに関する質問項目を含めたアンケート調査である①事前調査と調査 I、次に調査協力者の発音自然

性評価である②調査Ⅱ、最後に調査協力者に半構造インタビューを実施した③調査Ⅲという順に行われた。調査協力者は日本語を専攻した JFL 学習者 4 名を対象にした。

- ① 事前調査と調査Ⅰ：学習者ごとの背景、プロフィール調査をした上、インタビューを実施する前に言語学習に関するアンケート調査を行った。アンケートの質問項目は学習動機、学習ストラテジーに関連する項目である。
- ② 調査Ⅱ：学習者にイントネーションの判別がつく例文の音読をしてもらったあと、母語話者 5 名に発音の自然性評価を六段階評価で評価してもらった。評価した結果を点数に変換し、4 名の学習者の発音自然性を順番に表した。また各学習者の発音に対する印象についてのコメントを書いてもらった。
- ③ 調査Ⅲ：4 名の調査協力者に、事前調査と調査Ⅰ、調査Ⅱの結果を踏まえ、半構造インタビューを実施し、発音の学習過程を聞き取った。

#### 第 4 章 分析結果

第 4 章では各学習者の語りから得られたデータを分析し、考察した結果についてそれぞれ説明をした。

まず、分析結果を《日本語学習経験》、《母語話者との接触》、《学習動機と自己評価》、《発音学習》の 4 つの大きい項目に分けられ、その下に小さい項目としての 8 つのカテゴリーがデータから抽出できた。《日本語学習経験》では【教育機関での日本語学習経験】のカテゴリーについて記述し、学習者が日本語教育機関で受けた日本語教育及び学習経験の内容で構成された。《母語話者との接触》では【日本人との接触】のカテゴリーについて記述し、学習者が普段母語話者との接触頻度及びその状況、交流意欲、エピソードと母語話者に対する印象などの内容で構成された。《学習動機と自己評価》では、【日本語発音・日本語学習の動機】、【言語学習に関する自己評価】の二つのカテゴリーについて記述した。【日本語発音・日本語学習の動機】では発音が将来の仕事における重要性や発音の学習動機についての内容であり、【言語学習に関する自己評価】では日本語と日本語以外話せる外国語の全体、そして発音のレベルに対する自己評価の内容で構成された。《発音学習》では【発音に関する経験談】、【発音学習の経験及び気づき】、【発音・発音学習に対する考え方】、【学習ストラテジー】の 4 つについて記述した。【発音に関する経験談】では発音をめぐったポジティブやネガティブの経験談の内容であり、【発音学習の経験及び気づき】では発音の受講経験と受講内容、教師や他人による発音修正、そして発音学習に影響を与える可能性のある諸要素から

発音学習との関係性の気づきについての内容である。【発音・発音学習に対する考え方】では、発音学習の重要性、教師が発音学習における重要性、母語話者並みの発音になる重要性、発音が意思伝達や日本語レベルの見え方に与える影響と JFL 学習者の可能性と困難点についての内容で構成され、【学習ストラテジー】では各学習者が利用している発音の学習方法についての内容である。

## 第 5 章 総合的考察

第 5 章では分析結果の比較及び全体的考察について記述し、二つの RQ に対する考察をまとめた。まず RQ1 の答えに対し、調査協力者 4 人の語りから各々の学習過程における共通点と相違点についてまとめた。その中で、今回調査協力者の中で発音の自然性評価で得た点数が二番目に高い Y さんと一番目に高い E さんは共通的な特徴が多いことがわかった。共通している特徴としては以下の 9 つである。(1) 在学中に母語話者との接触が頻繁であり、母語話者との接触にポジティブな姿勢が見られた。(2) 卒業後に日本語の学習や日本語の使用頻度を下げず、継続的に日常生活に日本語を頻繁に使用するような環境にいる。(3) 自身の発音の正確性に自信があり、日本語によるコミュニケーション場面に苦手意識を持たないで自信を持てる。(4) 日本語の学習や発音の学習を将来に活かしたいという意思が強く汲み取れ、将来的展望が日本語との関係性にこだわりを持っている。(5) 発音の自己評価においてよく周囲にある他者から高い評価をされるが、自身の発音に対する評価も厳しく、発音の比較基準が母語話者の発音であり発音に対する要求が高い傾向が見られた。(6) 日頃から大量なインプットをし、自ら日本語の環境を作り上げることに心がけている。(7) シャドウイングの練習時に利用する音声対象の選別は、好みや興味に合うコンテンツや対象よりもモデル音声の正確さが選別の基準となり、多種多様な音声を練習に取り入れる傾向がある。(8) 発音をする際に口の形に対して意識をする。(9) 練習時に修正に必要性を感じる箇所に対して発音の正確さの精度を要求し、繰り返して練習する習慣を持っている。

これと比較し、発音の自然性評価の得点が一番低い K さんと二番目に低い G さんは Y さんと E さんとの特徴が違ったが、両者の間にも同様に共通しているポイントを 9 つまとめることができた。(1) 在学中に母語話者との接触頻度が低く、母語話者との接触を避ける傾向が見られた。(2) 卒業後に日本語の学習と日本語の使用頻度が下がり、日本語の環境から離れ、日頃に日本語を使用する機会がほとんどない環境にいる。(3) 自信の発音の正確さに自信が持てず、日本語によるコミュニケーション場面に対して苦手意識を抱いている。(4)

日本語の学習や発音の学習を将来的展望と繋ぐ意思が比較的弱く、強いこだわりを持っていない。(5) 自身の発音に対する評価と要求も低い傾向が見られた。(6) 日頃に大量なインプットや日本語の環境作りを特に実践していない。(7) シャドウイングの練習時に利用する音声対象の選別は興味をそそるコンテンツや好みの対象の音声を利用する傾向があり、固定的で単一な種類のモデル音声を練習時に取り入れる。(8) 発音をする際に特に口の形を意識していない。(9) 練習時に修正に必要性を感じる箇所の把握をしていなく、発音の正確さの精度に対しても特に要求をしないで繰り返して練習をする習慣を持っていない。また RQ2 の答えに対し、各学習者の発音学習過程を発音の自然性評価にて母語話者が学習者の発音に対する印象のコメントと一緒に分析し、発音に与えた影響について全体的な考察を行った。

## 第 6 章 結論と今後の課題

第 6 章では本研究の結論と残された今後の課題について述べた。結論としては JFL 環境で育てられた発音の自然性レベルが異なる学習者の発音学習過程を調査したことにより、自然なイントネーションを習得できた者とできなかった者の間にある共通点と相違点を見出すことができた。その上、各学習者の異なる特徴の発音にどのように影響を与えたのか明らかにすることができた。なお、今後の課題として次の二点を提示した。(1) 本研究はイントネーションにフォーカスした研究のため、学習者から得られた手がかりはイントネーション以外の発音学習にも適切であるかどうかはまだ検討する余地がある。(2) 本研究は母語話者との接触が発音学習にポジティブな働きをしていることがわかったが、母語話者との対面接触が困難な場合がある JFL 学習者に対して遠隔方式による母語話者との交流や発音指導、発音学習のサポート提供が JFL 学習者の発音学習に与える効果については、改めて調査する必要があると考える。

## 参考文献

- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『日本語教育論集世界の日本語教育』5、pp.139-154
- 張若星 (2015) 「中国人日本語学習者の韻律理解力について」『大阪大学言語文化学』24、pp.87-100
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68、pp.175-189